

18-3 ウエペケレ

「トパットウミ オッタ アサハ トウラ アエイツカ」解説

語り手：平目よし
聞き手・解説：萱野茂

萱野：わたくしは、物心ついたころには一軒の大きな家に、父と母と思う人に養われて生活をしておりました。4つ5つ6つとなったころになってから、隣村から遊びに来たといって私より2つ3つ年上の女の子が遊びに来るので毎日一緒に遊んで、春は春、夏は夏というふうに、仲よく暮らしておった。

そういうふうにして何年かし、私自身も7、8つぐらいの女の子になり、まあ一緒に遊んでおった女の子も10……まあ2、3ぐらいになると。そうやって毎日楽しく暮らしており、その遊びに来る女の子にも、わたくしの父や母たちは一緒に食べさせ、たまにまあ一緒に食べさせたり一緒に可愛がったりするので、まったく不自由もなければ楽しい生活を送っておった。

そうしておるうちに、その姉がぱったり来なくなった。どうしてこないのだろうか、姉というよりも一番いい遊び仲間の女の子が遊びに来なくて、寂しくておった。

ある日のこと、まあ父と思っておったその育ててくれた、おじさんの言うのには、本当は、あんたは私とこの子どもではありませんと。昔むか……昔々と言ってもまあ5年か6年昔に **topattumi** [夜襲] といって、この石狩の川尻の方の村へ、いわゆるその、村を襲って全部その隣村の者を殺すことに自分も誘われて行ってひと村を殺したことがあったと。けれどもその時にその、よくその……

まあここで話変わってるんですけど、その育てられたおじ……おじさんの話を言う……話が……育って……、女の子を育てたおじさんが今話をしておるんですが、私たちの父であった人の言うのには、「決してその **topattumi** [夜襲] というその、よそ村へ何かで襲って行っても、村の者全部殺すものではないよ」ということも聞かされており、「行っても人を殺したりはするもんでない」というふうにも聞かされておったんだけど、その **topattumi** に無理に誘われたと。

そしてその時に、行くの嫌がったら、「お前行かなけりやお前も殺すぞ」と、脅かされたので不承不承にわたくしも一緒に行って、まあ村の近くへ行って、まあ野営して、そして **aynu** [アイヌ] の風習でその、そういう村を襲う時に何かその、いわゆるお祈りをすると、村の上はじから1つの炎の玉が下へ落ち、下はじから炎の玉が上がり、上はじへ落ちるともうその村の者は全員眠っているんだというその、迷信というか、そういう風習あるんで、まあそれと同じようなその、お祈りをし、そしたら今言ったような、村の上はじへ下はじへというふうに炎の玉が落ちたの見たと。

それで村をずっとまあ一軒一軒人を殺して行ったら、ある家へ行くと **sintoko** [行器] って言うまあ、いわゆるアイヌのあの、本州から渡って来たところの塗り物ですがその **sintoko** の中へ姉妹 (きょうだい)、お前といつもここへ、つい先日まで遊びに来ておった女の子、姉妹で **sintoko** の中へ入れられておったと。それをあまりにも綺麗な女の子姉妹であったので殺すの可哀そうで、それについて [連れて] 来て、わたくしは妹であるあんたを育てたと。

そしたら姉は隣村の者たちが育てたのに、この頃遊びに始終来るのを見て、きっとその、夜そういう泥棒ちゅうかその、夜その村を襲って助けて来たちゅうことをおぼえたので、遊びに来ているんだろうと。これは殺さなければ私たちの村が逆に襲われるおそれがあると、そんなふうに言ってその女の子を殺してしまったんだと。だからあんたもここでいつまでおっては、良くないことになるから舟にたくさんの肉とか魚とか積んだからもう今晚のうちにすぐに行きなさい」。

と言って、まあ丸木舟にたくさんの肉、魚そうしたものを積んで、そしてまあ干し肉ですね。それは干し肉とか干し魚を積んで舟の舳先と艫のほうに **aynu teke kar kamuy** [人間が手作りした神] というのは **aynu** [人間] が手作りの、その神様を作って乗せて舟をぽっとまあ沖へ押すと。それがずっと行ってドカンと、この神様の守り、守護によって、どこかへ寄り上がるだろうからまあ、絶対、動いたり大きい声で泣いてはいけませんと言って、まあそこで始めて本当の父でない母でないこと分かった。その夫婦はそう言って私を舟に乗せた。

まあそのあたり非常に細かく、その「乗るの嫌だ」「いや、行きなさい」というふうにする描写なんか細かく出ておりますが、そんなことでまあ舟に乗せられて、私は1人もう本当に泣きながらだけど大きい声で泣いちゃいけないので、そのまま舟の中へ座ってぽっと舟を押し出したと。舟はそのまま **kanpe kurka ecarse** [水の上を滑る] というのはその水面を滑るようにその流れて、下がって行ったと。そしてそのまま、まあ1

日か2日流されて、海へ出て海辺をずっと流れて行ってどっかずっとその寄り上がった。

そしたらそこで姉妹(きょうだい)らしい人声がして「先に見つけた人が取るんだぞ」と言って競争してきて、みた。先を取ったのが姉だけれども私を見たのは、見たその瞬間というのは非常にその顔色変えて「こんなに、めんこい[かわいい]子ども、これ人間じゃないかもしれない」といいながら、尻込みする。そこへ妹だな？ 妹のほうだな、負ぶったのな？

平目：はい

萱野：妹の方が走ってきた。こんなにかわいい子ども、これはもう人間に間違いないと、すぐに背負って歩き始めた。そしたら姉の方は走って行って自分の家へ飛び込んで今、海辺へ寄り上がった舟から女の子を背負ってきています。それはもう人間でないかもしれないよ。と言いながらまあ先に行って……行っている。

それを聞きながら、わたくしは一緒に家の中へ入って、いろいろとその、話を訊かれるままに「こうこうで舟に入れられて来たんですよ」と言ったら、「そうかそうかと、それは多分その、家のその甥子の子どもであるはずだと」と、川向かいでいる甥……弟の子どもかそれ？

平目：兄貴の息子だ。

萱野：兄貴の、兄貴の、ああそうか。そしたらやっぱり甥子になるわけだもんな。

平目：甥っ子。

萱野：その人からいえばな。

平目：ku=karkuhu [私の甥] っていうんだ。

萱野：その甥子の住んでおった村で、村が何年か前に襲われて、その甥子は山へ行っている間に襲われたので、その村が全滅したんだけれども、死体を数えてみたならば「お前ら姉妹だけがおらない」と言って、その甥子はそれからもう気違いなるようにしてもう本当にまあ、すっ……すっかり気違いなってしまうとおったと。

それはお前をでも連れて行って見せたらなんとか気が付くんじゃないかと、明日になったら行ってそれを見せなさい。というふうに言われて、まあ、そこのお爺さんお婆さんにも可愛がられながらまあ次の日になってから、まあ親戚なるわけだがその若い男の人や女の人と一緒に行ってその本当の父である人はもう裸すっかり、気違いなって裸みたいになっているところ行って「これがお前の子どもだよ」と見せたことによってその、本当の父は気が付いたと。

そして涙ながらに、まあ再会を喜んだと。そしてかたき討ちにまだその、前のその娘は子どもが、女の子が育てられた家へ行こうと言ってそこを話きいて、なんとかしなくちゃというわけでまだ〔また〕舟を仕立てて石狩川を上って行ったと。

そして夜その、村を……、のそばを通るようにしてって自分だけがそうだ、自分が育てられた家へは到着して、そして、そこへ到着したら、そして夜、夜中なのに行ってみたら **ape nipek an** [火の光がある] というのはこう、火が外へ洩れておる、入ってみたらもう **ray pe siyuk** [死に装束を着る] と言ってもう死に装束そのまま、両方ともしておいて話を聞いたらば、「お前を逃がしたということで明日は殺す。というふうに言われたので、私たちはこのように死を覚悟して死に装束をしておるのですよ。」とそのように、言ってるそこへまあ一緒に行った人たちも入って来て話を聞いて「よし、それならもう、すぐに行って征伐してやる。」と逆にその隣村のその何軒かの家を行っ……とこへ行って、全部皆殺しにして、仇を討ったと。

そして、その早く私の育ての母や育ての父をも石狩の川尻の私たちの村へ連れて来て、うん、大切に養って、**onne** [亡くなる] した。いわゆる亡くなりましたと1人の女が語りましたという **uepeker** [散文説話] ですね。

やっぱり **uepeker** どれでも同じですけれども昔の生活が細かくその、描写されておるので、こうしたのも、ひと言ひと言するんであれば、和訳するんであれば今私が言ったような短いものではありませんが、あらすじのみを和訳しておきます。